

cinema

心に残る映画

『ネバーエンディング・ストーリー』

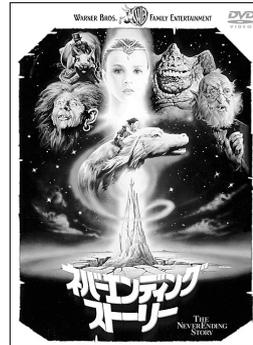
1984年／西ドイツ・イギリス／ウォルフガング・ペーターゼン監督作品

夢中になって読んだ原作の映画化は…

言わずと知れたドイツの児童文学の大家、故M・エンデの名作「はてしない物語」の映画化である。太っちょで不器用ないじめられっ子のバスチアン少年が、読んでいた本の中の世界に飛び込んで大冒険を繰り広げるといふファンタジーである。私は小学生のとき「はてしない物語」を夢中になって読んだ1人であるが、映画化された「ネバーエンディング・ストーリー」を見て目が点になったのを覚えている。

原作では、本の世界に飛び込んだバスチアンのその後はこう描かれている。本の中の世界「ファンタージエン」では、何でも願いが叶う。コンプレックスの塊だったバスチアンは、美しい容姿、勇気、機敏な身のこなしなどを手に入れ、ついにはファンタージエンの王になる。しかし実は、この世界では願いが叶う代償として現実の世界での記憶が少しずつ失われてしまうのである。本来の自分を完全に失ってしまう恐ろしさに気づいたバスチアンは、わずかに残った記憶を頼りに必死に元の世界に戻る努力を始める。やっとのことで現実の世界に戻ったバスチアンは、元通り太っちょで不器用なただの子供に戻っていたけれども、ファンタージエンでの経験を通して、ほんのちょっと勇気を身につけていた。…なんとも深い、考えさせる話ではないか。

なのに…、なのに…。映画のラストはあまりにひどかった。本の中の世界に飛び込んだバスチアンは、空飛ぶ龍に跨がって、脳天気「ハッホー」なんて叫んでいるのである。そしてそのまま現実の世界に戻ってきて、こともあろうに、かつて自分をいじめたいじめっ子たちを龍に乗って追いかけて回して仕返すのである。なんなんだこれは。



『ネバーエンディング・ストーリー』DVD
発売元：ワーナー・ホーム・ビデオ
価格：2,100円(税込)
品番：DL35499

バスチアンが虚構の世界で身につけた力を何もかも捨てさせた原作のラストの奥深さと比べ、魔法の力を復讐に利用して喜んでいる映画のラストの安直さ。あんまりだ。あんまりすぎる。いくら子供だましにしても、子供だってだまされない(と、子供心に思った)。

* * *

今回の原稿のテーマが「心に残る映画」ということでしたので、最初「好きな映画」「おもしろかった映画」について何か書こうと思っていたのですが、なかなかいい紹介文が思いつかず(おもしろかったものって、なんとなく感想が平板になってしまうんですね)、よくよく考えてみたら、今までに一番「心に残った」のが、あまりのしょうもなさ忘れようにも忘れられない、この「ネバーエンディング・ストーリー」だったんです。

かなり辛口な批評をしてしまったのですが、単なる空想娯楽映画、と思えばそれなりに楽しめるとは思いますが、でも、これだけすばらしい原作の味を生かし切れていないのはやはりもったいないです。最近「ハリー・ポッター」や「ロード・オブ・ザ・リング(指輪物語)」等、優れた原作を、大人も子供も楽しめる質の良いファンタジー映画化することに成功した作品がたくさんあるので、から、「はてしない物語」がこのまま埋もれてしまうのは寂しいな、と。

誰か「はてしない物語」をリメイクして、今度こそ映画史に残るような名作にしてくれないでしょうか。「はてしない物語」を多くの人に知ってもらいたい一読者の切なる願いです。

(会員 八掛 順子)

心的トラウマの 理解とケア

◎編者◎
厚生労働省 精神・神経疾患研究委託費外傷ストレス関連障害の病態と
治療ガイドラインに関する研究班
主任研究者 金 田 晴

JiP じほう

『心的トラウマの理解とケア』

厚生労働省 精神・神経疾患研究委託費外傷ストレス関連障害の病態と
治療ガイドラインに関する研究班 編集 じほう 発行 2100円(税込)

“弁護士は言葉が命” 自戒促す必携の1冊

本書は、厚生労働省精神・神経疾患研究委託費による「外傷ストレス関連障害の病態と治療ガイドラインに関する研究」をまとめたもので、国内の大学や医療機関等の研究者ならびに研究協力者多数が3年がかりでまとめた本であり、類書に比して信頼性が高く安心して読める本である。司法修習のとき、検察庁の資料室で本書と出会った。

本書は、総論と各論に分かれ、各論として「交通事故」「性暴力被害」「遺族」「子供のトラウマ」など、弁護士業務に頻出の「トラウマ」が盛り込まれている。本書は、直面した「トラウマ」ごとの独立した章立て構成で、かつ、手帳サイズの大きさ厚さなので、事件の打合せの朝、必要な章を電車の中で拾い読みをすることができる。というより、そうして欲しいからこのような装丁になっているようである。

弁護士は言葉が命と教わった。しかし、知らぬ間に人を傷つけていないか、私は毎夜1人で心配になる。

以下のような言葉はつい親切心で言ってしまうようになる(以下ケース1, 2は本書を引用)。

●ケース1

「私ならこんな状況は耐えられません。私なら生きていら

れないと思います」

→しっかりしていると誉めるつもりでいわれていることが多いのだが、おめおめと生きている自分を非難されたと感じる人が多いとのことである。

●ケース2

「あなたが元気にならないと亡くなった人も浮かばれないですよ。泣いていると亡くなった人が悲しみますよ」

→悲しいときには泣いていい、元気を失っていいという原則が守られていないとのことである。

本書により、被害者の「トラウマ」は、想像以上に深刻で、一般人の常識や想像力で対処できるものではなく、相当の知識や技術が必要であることを痛感した。嗚呼、そうだったのか、私のあのときのあの一言は余計だった、と後悔と自責の念に駆られる1冊である。

本書は手帳サイズであるため、私は本書を本棚の目立つところにおいておき、長時間の移動等の時は鞆の中に入れて繰り返し読んでいる。

(会員 水谷 渉)